

# Intensive parenting attitude(育児への徹底性)尺度の 開発と養育行動との関連

(中間報告)

愛媛大学教育学部 江上 園子

## Constructing the Japanese Version of the Intensive Parenting Attitude Questionnaire (IPAQ) and its correlation with child-rearing behavior

Faculty of Education, Ehime University, EGAMI, Sonoko

### 要 約

本研究は Intensive parenting attitude questionnaire (IPAQ)の日本語版を作成し、“intensive parenting”と養育行動との関連を明らかにすることが目的である。母親が子どもの養育の責任を一手に担い、自分の時間も労力も資金も割くことを当然視する“intensive mothering”(Hays,1996)の問題がアメリカをはじめ先進諸国で提起されはじめている。我が国の母親をとりまく子育てをめぐる問題の整理や見直しのためにも、果たしてその傾向が弊害となるのか、あるいは我が国ならではの影響があるのか検討していく必要がある。本中間報告では、1648名の母親を対象とした質問紙調査の結果を分析し、IPAQの信頼性と妥当性を検討した結果を述べる。

【キー・ワード】 intensive parenting attitude (育児への徹底性), 母親, 養育行動

### Abstract

The aim of this study was to construct the Japanese version of intensive parenting attitude questionnaire and examine the correlation with child-rearing behavior. Hays (1996) introduced “Intensive Mothering”, which is the ideas child-rearing is primarily a maternal responsibility and mothers are to devote their time, energy and money to their children. In the developed countries including the United States, the scholars have stated this concept has negative effects on mothers. To organize maternal problem about parenting in Japan, it is necessary to investigate the effects of “Intensive Mothering”. In this progress report, I showed the reliability and validity of the Japanese version of IPAQ on 1648 mothers’ responses.

【Key words】 intensive parenting attitude, mother, child-rearing behavior

## 問題と目的

親が子どもに時間も労力も資金も割いた徹底的な育児を行うことを“intensive parenting” (Hay, 1996)と呼ぶが、アメリカでは現在、母親が抱くこの傾向の強さが母親の精神的な健康を阻害するという結果が出ている(Rizzo, Schiffrin, & Liss, 2013)。女性の社会進出の必要性が謳われ実際に先進諸国ではその動きが著しい中でも、実際には母親の育児への徹底的な態度を支持する信念が総じて強固であり、それによってストレスを抱えてしまう母親たちの存在が世界的に問題視されつつあるのだ。

我が国でも「母性愛」信奉傾向(社会文化的通念として存在する伝統的性役割観に基づいた母親役割を信じそれにしたがって育児を実践する傾向)が母親を取り巻く状況によって母親の養育態度に正負の影響を与えることが示されている(江上, 2005, 2007, 2013)。ただし“intensive parenting”は「母性愛」信奉傾向より広い領域で多次的に説明した概念(「子育て困難感」「子どもへの知的な刺激」等の下位因子を含む)であり、日本ではこの概念がどのように母親たちに深く浸透しているか測定している研究はない。したがって、現代の日本の子育てを見直すためにも、“intensive parenting”すなわち「育児への徹底性」の実態とその影響を海外と比較しながら明らかにすることが不可欠であろう。

これらのことを検証するため、本研究は“Intensive Parenting Attitudes Questionnaire”(IPAQ)の日本語版を作成することを目的とする。IPAQの翻訳の許可は尺度作成者のLiss(2013)からすでに得ており翻訳も行っているため、まずはIPAQの信頼性と妥当性の確認を行い、日本でも適用可能なものを完成させる必要がある。そのため、我が国のデータを用いて尺度の信頼性を検討し、「母性愛」信奉傾向尺度(江上, 2005; 2007)や早期教育評価尺度(清水・相良, 2011)ならびに育児への否定的・肯定的感情尺度(荒牧・無藤, 2008)等の類似概念との関連を調べることにする。

## 方法

**①調査時期や対象者および手続き** 2017年11月30日および12月1日に、乳幼児を養育中の全国の母親1648名を対象としたインターネットによるアンケート調査を行った。アンケート用紙を著者が考案のうえ、インターネット上でアンケート調査を行う業者とやりとりを行い、調査の実施は業者に任せた。

**②調査内容および質問項目** 質問項目はIntensive parenting attitude (Liss, Schiffrin, Mackintosh, Miles-McLean, & Erchull, 2013)の25項目を和訳して「育児への徹底性」と邦題をつけたもの(6件法)と、「母性愛」信奉傾向尺度(江上, 2005, 2007)13項目(5件法)、育児への否定的・肯定的感情尺度(荒牧・無藤, 2008)16項目(4件法)、早期教育評価尺度(清水・相良, 2011)25項目(4件法)ならびに調査対象者の年齢や就業形態・教育歴などのフェイスシート項目である。Intensive parenting attitudeについては尺度筆頭作成者のLiss, M. から日本語への翻訳と尺度使用の許諾を得、筆者が和訳したものを心理学の翻訳専門家に添削を依頼した上、別の英語ネイティブの専門家がバックトランスレーションを行ったうえで日本語の質問項目を決定した。Intensive parenting attitude(育児への徹底性)

は Essentialism (本質主義: 女性が生来的に子育てに向いているという考え)・Fulfillment (達成感: 親役割を受容し満足感を伴うものであるとする考え)・Stimulation (刺激: 子どもに知的な刺激や教育的機会を与えるべきとする考え)・Challenging (困難: 子育ては疲労や困難を感じさせるものだという考え)・Child-Centered (子ども中心: 親自身よりも子どもの都合や要求を優先させるべきであるという考え) という 5 つの下位尺度から構成されている。

## 結果と考察

### 1. 各尺度得点の算出

Intensive parenting attitude を作成した海外の先行研究との比較・検討を可能にするために、それぞれの下位因子で Cronbach の  $\alpha$  係数を求めた。その結果、「本質主義 6 項目( $\alpha=.74$ )」・「達成感 3 項目( $\alpha=.73$ )」・「刺激 3 項目( $\alpha=.55$ )」・「困難 6 項目( $\alpha=.63$ )」・「子ども中心 3 項目( $\alpha=.67$ )」であった。信頼性を確かなものとするために、「本質主義」から 2 項目、「達成感」から 1 項目、「刺激」から 1 項目を削除した。

育児への否定的・肯定的感情尺度は 3 因子構造で「育児肯定感 3 項目( $\alpha=.67$ )」・「育児負担感 5 項目( $\alpha=.81$ )」・「育児不安感 6 項目( $\alpha=.86$ )」, 「母性愛」信奉傾向尺度 13 項目は 1 次元( $\alpha=.89$ )、早期教育評価尺度は 2 因子構造で「学習能力 11 項目( $\alpha=.86$ )」・「心理的発達影響 8 項目( $\alpha=.83$ )」というそれぞれ先行研究通りの因子構造が得られたが、信頼性係数を向上させるためにいくつかの項目は削除した。

### 2. 変数間の相関

IPAQ との理論的な連関を仮定していない「心理的発達影響」を除く、すべての尺度の下位因子得点間の相関係数は表 1 の通りである。

表 1 変数間の単純相関係数

	本質主義	達成感	刺激	困難	子ども中心	「母性愛」信奉	学習能力	育児肯定感	育児負担感	育児不安感
本質主義	1									
達成感	.199**	1								
刺激	.249**	.259**	1							
困難	.481**	.161**	.292**	1						
子ども中心	.338**	.467**	.287**	.334**	1					
「母性愛」信奉	.378**	.496**	.278**	.207**	.487**	1				
学習能力	.199**	.136**	.506**	.194**	.172**	.327**	1			
育児肯定感	-.063*	.539**	.158**	-.139**	.226**	.283**	.053*	1		
育児負担感	.154**	-.308**	.018	.304**	-.112**	-.174**	.048	-.395**	1	
育児不安感	.148**	-.073**	.103**	.317**	.090**	.023	.168*	-.208**	.415**	1

表 1 の通り、IPAQ の「本質主義」は女性が育児を負担するのが妥当であるという考えであり、「伝統的性別役割に基づいた母親役割を信じる傾向」である「母性愛」信奉傾向と有意な中程度の正の相関が見られた。「達成感」も想定通り、「子どもを可愛く感じ育児が楽しい」という「育児肯定感」と有意な強い正の相関が見られた。「刺激」についても想定していた通りで、「早期教育を受けることで知識を身につけること」を重視する「学習能力」と有意な強い正の相関が見られた。一方、「困難」

は、「いま置かれている状況に対するイライラ」である「育児負担感」や「子育てに自信が持てず不安である」という「育児不安感」との両者の間で有意な中程度の正の相関が見られた。「子ども中心」は、やはり「母性愛」信奉傾向と有意な正の中程度の相関があるが、これは「母性愛」信奉傾向の「子どもに対する母親の愛情や献身を重視する志向」と関連が想定されるからだろう。

したがって、IPAQ の各下位因子における基準関連妥当性はおおむね認められたと言えよう。しかしながら、下位尺度の中には「刺激」のように信頼性が高いとは言えないものも見られる。項目数が少ないこともその原因として挙げられるが、今後は因子構造の見直しも含め、信頼性や妥当性においてより確かな尺度として完成させる必要があるだろう。そのうえで、我が国における“intensive parenting”の実態の把握やその影響についても海外との研究結果と比較しながら検討していきたい。

## 引用文献

- 荒牧美佐子・無藤隆 (2008). 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い：未就学児を持つ母親を対象に *発達心理学研究*, **19**, 87-97.
- 江上園子 (2005). 幼児を持つ母親の「母性愛」信奉傾向と養育状況における感情制御不全 *発達心理学研究*, **16**, 122-134.
- 江上園子 (2007). “母性愛”信奉傾向が幼児への感情表出に及ぼす影響——職業要因との関連 *心理学研究*, **78**, 148-156.
- Hays, S. (1996). *The cultural contradictions of motherhood*. New Haven, CT: Yale University Press.
- Liss, M., Schiffrin, H. H., Mackintosh, V. H., Miles-McLean, H., & Erchull, M. J. (2013). Development and validation of a quantitative measure of intensive parenting attitudes. *Journal of Child and Family Studies*, **22**, 621-636.
- Rizzo, K. M., Schiffrin, H. H., & Liss, M. (2013). Insight into the parenthood paradox: Mental health outcomes of intensive mothering. *Journal of Child and Family Studies*, **22**, 614-620.
- 清水美恵・相良順子 (2011). 早期教育評価尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 *日本心理学会第 75 回大会発表論文集*, 1092.